マレーシアでは比較的早くから日本人専門家による機械化体系の導入が試みられていた。ここでいう機械化は日本で普及した小型機械を駆使した稲作である。東南アジアの稲作農民に大型機械の導入は困難との考えが，日本人専門家たちの中では根強かったと思われる。しかしながら，実際にはマレー系農民たちはいくら小型であっても彼らにとって高額な機械には手を出だすことは無かった。機械が必要な作業は中国系のコントラクターに任せるという姿勢であったが，それでも日本人専門家は小型機械の普及にこだわり続けたようだ。国民性や価値観の違いもあったかもしれない。大型機械で地耐力の低い軟弱な水田を縦横無尽に走り回った後の耕盤や畦畔の破壊などを見ると，水田管理を精緻に行う日本人の美意識からかけ離れた水田の姿となる。MADA の企画部長だったジェガシーサン氏は，「日本の技術協力は，日本で成功した稲作開発のモデルをそのままマレーシアに移植しようとしたのではないか」と遠慮がちに批判されたそうだ（諸岡 2020）。ムダ平野出身のマハティール首相は「ルックイースト（日本に学べ）」を唱え，マレーシア独自の近代化を進めるために日本の企業運営や勤勉さを見習おうとした。しかし，日本の真似をしてその後をなぞるように追いかけようとしたのでは決してなかったようだ。

参考文献

諸岡慶昇 2020. 現地における農業開発協力の課題―マレーシアの人は稲作技術協力をどう見ているか―. 北馬回想 第 1 号 , 58-66.

Watanabe *et al*. 1996. Ecology of major weeds and their control in direct seeding rice culture of Malaysia. JIRCAS/MARDI/MAD. 共同研究最終報告書． pp1-202

渡辺寛明 1997. マレーシアのかんがい水田地区における最近の雑草問題 . 植調 30(10), 349-356.

渡邊寛明 2021. マレーシアでのこと思いつくままに . 北馬回想 第 2 号 , 19-27.

田畑の草種（くさぐさ） 小判草（コバンソウ）

（公財）日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地　須藤　健一

旦那，お変わりございやせんでしたか。その節にはずいぶんとお世話になりやした。私（あっし）もこの江戸は十年ぶりでございやす。この十年の間に，鼠小僧（ねずみこぞう）としての稼業からすっぱりと足を洗いやした。いえね，足を洗ったとはいいながら，鼠としての最後の大仕事の千両箱が気になって，さっき，確かめに行ってきたところでやす。いえ，普段は 30 両，50 両の小さな仕事ばっかだけど，最後の仕事で入った大名屋敷に千両箱がずんと積まれていたから，その一つをいただいたまでなんだけどね。

ところが千両箱があまりに重てぇので逃げるのに手間取って，役人に追われる羽目になっちまって。その折に旦那に匿（かくま）ってもらったお礼に，そこから幾何（いくばく）かでもお持ちしようと隠したトコを見に行ったのですよ。いえね，隠したトコといっても，ここのすぐそばの於岩（おいわ）稲荷神社の祠（ほこら）の裏に穴を掘って埋めただけなんでさ。祠の裏といっても，何せ真っ暗な夜だったもんで，どの辺りを掘ったのか皆目見当がつかねぇ有様で。それでその祠の真裏を掘ってはみたもののそれらしいものもなく，途方に暮れてやがるとこでさぁ。

旦那，私（あっし）はこれからまた江戸を離れやす。旦那にもしその気がごぜえやしたら，掘ってみてくだせえ。出てきやしたら全部旦那に差し上げやす。

でもね旦那，於岩稲荷神社のあちこちにこんな草が生えておりやす。何本か抜いてきやしたが，この草，どうみても黄金色した俵か小判にしか見えねぇ。ひょっとすると於岩さんの怨念が千両箱の小判をこの草に変えてしまったのかもしんねぇ。私（あっし）にとっとと鼠稼業から足を洗え，ってさ。

鼠小僧が見たコバンソウはイネ科コバンソウ属の一年草。北陸から関東以西と秋田県で確認され，路傍，荒地，草地などの日当たりの良いところを好む。直立し，背丈は 10cm ～ 60cm。茎の上部に数個の小穂のついた円錐花序を形成する。細い枝で垂れ下がり，小穂は長さ 10mm ～ 20mm の長卵形，8 ～ 18 個の小花からなり，扁平で厚みがあり，熟れてくると黄褐色の光沢があり，小判のように見える。この小穂が小判に似ていることから和名が付いた。コバンソウは観賞用に明治時代に導入されたとされるが，同属のヒメコバンソウは江戸時代には渡来し，各地に帰化している。また，両種が混在することもあることからすると鼠小僧の時代に，すでにコバンソウも広がっていたのかもしれない。